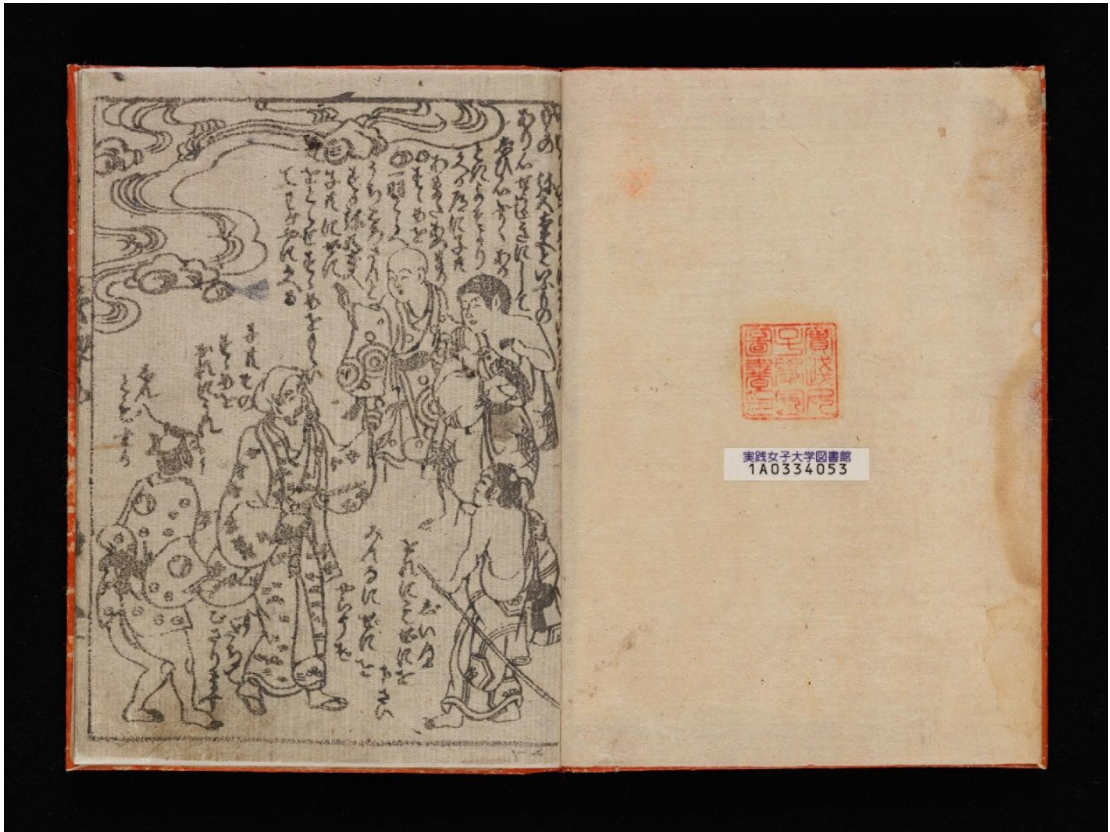


『したきれ雀』（鱗形屋板）後摺本



「中むかしの事なるに」さるいなかに

もゝの弥五太夫といふもの

あり 心せうじきにして

じひ心ふかく ある

とき よそより

かへる道に子供

あまたあつまり

すゝめを一羽とらへ

うちころさんと

する 弥五太夫

子供にぜに

をとらせ すゝめをもらい

て わがやにかへる

(弥五太夫) 子供 そのすゝめをおれにうれ

(子供) じい様 をれにもぜにを下さい

(弥五太夫) みんなにぜにをやろうぞ

(新八) すだちてごさいます

しん八 ともする



弥五太夫すゝめをかいとり うちへもどり

むすめお梅によるこぼする

お梅すゝめを てうあいしけり

(弥五太夫) これむすめ じいがよいみやげやらうぞ

(新人) 百でかいました

むすめうれしがる

けんどんばゝはらたてる

(慳食婆) をやつかな あんにすべい【もし】

(慳食婆) じゝいどの つんにがさつしやい

あるとき じゝのる【すに】

「ぼゝ せん」たくするとして のりをにてさましをきける かのすゝ

めかごより出 のりをすこしなめければ けんどんばゝ 大ぶん

はらたち なさけなくも すゝめのしたをきつて はなしけり

(慳食婆) につくいすゝめだ いそがしいに

せつかくにたのりを みんななめた はらがたち申

(お梅) かゝ様 むごい事なされますな

(舌切雀) ちうくく



弥五太夫 すゝめを ふびんに をもひ お梅がてを引 たづねに
出けり 下人新八

(お梅) したきれすゝめ ちよつくく

(弥五太夫) したきれすゝめ ちよつくく

をやすゞめ弥五太夫が心を

かんじ すげの松原迄むかいに出

礼を申て ともない行 大ぶんちそう「する」

(新八) だんな むかいがすゞめ殿の内かな

さてくけつこうな門がまへかな

お梅様 すゞめとのにあい「ますぞ」

大ぶんくたびれた

すゝめのかくれざと 門がまへ

(弥五太夫) しらかべ作りのすゞめ殿の所はこゝかな 「き様は」けら
いしゆか

(お梅) はやくすゝめどのに あいとう「ござる

(雀の家来衆) 弥五太夫様 よふこそ御出なされました 此ほうの
むすめ子も いかいよろこびで「ござりますす



(舌切雀) 御じい様 御ちそうに をどりを申付ました
お梅様 よふ御らん あそばしませ

(弥五太夫) こなたのしたは なをりましたか
これは菊之丞がした やりをどりじやの

むすめをもしろがる

(お梅) 新八をもしろいの ちとほめやれ

(新八) いよいよ をらが せ川様「め」

(三味線) 「ちんてく ちんちり」 つてつん ちりくくく
つんてん いよいよ

(唄) 「さまにあふてのあさ」がへりけしきたのしむ

男はだてに 又とあるまい 一代やつこ しかし こよいは
かりねの枕 恋の中の町 御さきで ふれく 御ともで
ふれく

弥太夫 ちそうにすゞめの げいしやども

せ川がをどりし

一代女のしよさ事 大でけく



すゝめのけらいども すこしのうちも 弥五太夫になじみて
のこりをがり みなくいとまごいする

弥五太夫かりそめに すゝめのもとへ たづねきたりて ゆるゆる
ちそうにあい みやげにつゞらもらい
てかへる ばゞ様へもみやげせんとて をもきつゞらを
しん八にしよわせてかへし すゝめなごりのところ

(舌切雀) 御じい様 をなごりをしや

(弥五太夫) 「さてく」 ちよつときて 久々とうりうして
いかいぞうさになりました ゑんもあらは そのうちあいませふ
さらばく

(新八) だんな わたしがしよつたつゞらは 大ぶんをもふごさり
ます

(弥五太夫) 此つゞらは大ぶんかるいぞく すゝめどの さらばく

(お梅) をさらばよ かゞ様がまつて ござらう はやく参りまし

【よ】



じゝ内へかへり すゝめにもらいし かるきつゝらを あけみれば
 金銀たくさんに いろくけつこうなるもの斗出て 一生急いぐわに
 くらしけり

けんどんばゝ 「どう」よくなれば をもき つゞらのふたあけけれ

〔ぼ〕 いろくのばけ物いでゝ ばゝにくいつく

(化け物) もゝんぐはゝ〔く〕

(慳食婆) のう こわや

*破損部分は、推定により「」で補記した

(翻字 松原哲子)

